

(北村) 知の生産のルーチン化? 動向研究が多いこと、新しいモデル提案少ないなどは問題!

本学会でも、論文投稿数の減少や熱意の低下とも言える傾向が見られる。まだ明確な傾向とは言えないが、『知の生産』や『知の権利化』といった部分への意欲は大丈夫かなと思われる。

(湯本) 論文投稿減少~産学連携の幅も方向性も全て拡大して来ている現状を鑑みて少し寂しい? 学会設立に際しマイクロクレジットを引用、お金の重要性を話した記憶がある。産学連携の拡大拡張への対応が、論文や発表に反映していないことは、気に掛かる。

(小野) 産学官金連携研究会を進めて来たが、研究の幅と深掘りも反映したい。

(フロア・大石博海) 先ほど湯本先生から建築学会との連携が話されたが、今までの文脈からも様々な拡大拡張を心がける必要があるし、他学会との連携もその一つである。学会以外の様々な主体との連携もあるべき。更に大学との連携も可能性大。学会プロジェクトとして検討したらどうか?

(木村) 此れまでの報告ばかりでなく個別にも色々有って、例えば支部内では、域内の各大学や団体との連携プロジェクトも行われている。各支部の活動拡大に沿って、更に進めて行ければと思う。

(大石) 私事だが、大阪商工会議所とも様々な取組みをしている。また学々連携になるかと思うが、私は医工連携に力を入れて来た。可能性は高いと思う。

(湯本) 私もK大在職時に医工連携に注力していた。医工連携はそれ自体、正に異種異質連携そのもので、得られるものは大きいと思う。

(木村) 私が関わっているものとして、浜松医工連携がある。直接的には静岡大学工学部・電子工学研究所と浜松医科大学との連携になるが、正に異種異質の連携の中で大学間の統合も含めて、いま苦勞しながら進めている。

(石塚) 此の会場で医工連携にいま関わっている方はどのくらい居られるでしょうか? 拳手を戴けると有難い。やはり、結構居られますね。

先ほどイノベーションベースのOSで発表させて戴いたが、かなり幅広くやりながら、それが今、全国的にネットワークが繋がって行こうとしている。今後に期待戴きたいし、本学会としても学会自前のプロジェクト推進の第一歩として、研究会制度を活用して、どんどん会員各位が手を挙げて戴き、進めて戴けると有難い。

(伊藤) 研究会推進制度も良い施策だが、個々の会への参加者が少ない。そこは何とかしたい。

(小野) 先ずいま一番認識を上げなければいけないのは、先ほど内島先生がコメントされたこと、即ち20年前から見ると産学連携活動自体物凄く拡大しているのに、『産学』という言葉に囚われて妙な壁を造っていないか? 大事な指摘だったと思う。論文評価でも『産と学』でなければ産学連携でない、というような妙な評価が時々あった。今後はそういう壁を壊して行くことも大切な作業である。

(伊藤) 関連して、私が会長時に『発表分類項目』の改訂を行った。論文提出や発表時にはやはり分る項目を見て発表先として選ぶメカニズムも有り得るので、改訂は大事である。

(北村) 関連して学術誌委員会から。論文投稿規定についても改訂を検討している。投稿

者が一番先に見るものなので、これらのアップデートも重要だと思う。

【30分】11:55

(湯本) 討論の部後半はこれから方向性として、地域と大学生残りの時代と言われることに触れてみたい。既に地域の疲弊は1980年代頃から、即ち我が国の都市部がバブルで沸いている時に始まりを見せており、バブルがはじけた1990年代後半には『限界集落』というような言葉も聴かれ、都市部との大きな違いがみられた。私が居た九州では、既に限界を超えているが余力が自治体に無く修理の出来ない橋が、ただ通行止めになり放置されている姿が在った。これはその後解決されたのではなく、今でも進行中である。地域と大学がセットで、生残りが言われるのは当然の事態である。此の時点で、地域との連携について少し掘下げておきたい。また関連してそうした地域のインフラを支える学会との、学会間連携もあるだろう。何度か出ている建築学会との連携は、土木学会も含めて地域のインフラをどう支え続けるのか、或いは無理が迫る中でどう選択と集中を判断するのか、かなり長期的な取組みも求められるが、此の場で論じられる範囲で話題にしておきたい。

先ずは沈んで行く我が国の工業であるが、かつて京浜・京葉などの工業地帯が栄え、そして沈滞して行く中で、伊藤先生から良く聴いたのは、『今や日本の工業の中心は北関東に在る』という言葉だったが、現状、『北関東、群馬』等はどうなのでしょう？

(伊藤正) 京浜京葉もかつてはありましたが、いま北関東一帯で最も工業出荷額の小さいのは東京です。そういう意味でも、工業地帯の状況は大きく変化しています。

(湯本) かつて日本の近代化を支えた北海道で、一つの中心たることを期して創られたのが、北見工業大学だと思います。石炭の出荷を背景にした工業中心は、今どう変わって来ているのでしょうか？

(内島典子) 北見はかなり以前から変わろうとし、今も変わり続けています。(いわゆる重工業ではないが)ものを造る工の精神は持ち続けて、何とか生き残ろうとしていると思います。変わることが大事です。

(石塚) 高知は別のOSやシンポジウムでも紹介していますが、基調講演やシンポジウムでも紹介したように、やはり特色を最大限生かして、例えば歯科医療材料製造などオンリーワンの製造業が新たに立地するなど、農林水産業だけでないものが育っています。

(木村) 浜松は明治近代化の中で新しい挑戦を続け(トヨタ織機、ホンダ、スズキ、カワイ、ヤマハ等の製造技術、テレビジョン等の映像技術)、更には光学技術の新しい応用分野等を産み出し、今また医工連携でも新しいものを産もうとしている。今後が大事だと思います。

(大石) やはり産業や技術の質転換が、今後は大事だと思う。

(石塚) そのためにも、本学会でも研究会をどんどん創って、色々な挑戦をすることが大事だと思う。

(湯本) 色々と、有難うございました。本学会のメリットを、もっともっと伸ばさせて行くことが大切だと思います。では最後に、現学会長で次期会長でもある石塚先生から、本日の議論を踏まえて(色々なプレッシャーが掛かっているとは思いますが)、まとめをお願いします。

6 まとめ：本日の討論を活かして今後の学会活動に思うこと（石塚悟史・現学会長）（5分）

まとめ（要旨）

先ずはやらなければならないことは多く大変だとは思いますが、先ずは基本的なことから始めたいと思います。そのためには、先ず会員のための学会、会員全てに居場所が在ること、執行部側からも積極的に会員になって戴いた方に切れ間なく働き掛ける。学会誌掲載論文の著者説明・発表会、地域・支部での居場所の用意と積極的な働き掛け、等々のことを着実に実行すること。研究発表分類表や枠組み・論文投稿規定は改訂すること。入会したら必ず議論を要する（入会すれば議論の場に加わる必要がある）学会として多様な場を準備すること。だからこそ、研究会をどんどん提案戴きたいことです。様々なことを通じて、コロナで失われたものを想い、コロナ前の何かを取戻すように誠心誠意、努力して行きます。

○討論後半②異種異質連携・知の生産を活かして、どう社会イノベーションを進めるか？
これについては時間切れで、深掘りは難しかった。今後の機会に期待したい。

課題：知財生産・活用・実装の一貫施行、シーズ・ニースの大学・地域等への幅広い募集等、新施策提案

・知的生産を行う場の整備（研究環境・知的財産権化支援（費用手間等）・研究第3作業支援等）

・（人材獲得（大学も地域も）／給与等待遇調整・主幹教授等の称号／研究費／特別な研究環境、等々）

・（大学発ベンチャー支援／スポンサー企業用意／等々が残された。次の機会に期待したい。

4 OS発表講演者：石塚悟史（高知大学）、木村雅和（静岡大学）、小野浩幸（山形大学）、伊藤正実（群馬大学）、湯本長伯（社会構造設計研究所）、5名

5 コメンテーター：北村寿宏（現学術委員長・島根大学）、内島典子（現広報委員長・北見工業大学）、伊藤慎一（現副会長・秋田大学）

※此のオーガナイズドセッションのまとめは、本学会誌でも詳細に報告される予定です。

※※以上、本学会高知大会・設立20周年記念オーガナイズドセッションにつきご報告でした※※

※学会誌次号は年末以降の発刊予定です。（電子出版）

※関係資料は別途学会HPにまとめて掲載しています。

http://www.j-sip.org/os_kiroku.html

当メールニュースではイベントのお知らせや公募情報等、産学連携に関する情報をお流しいたします。

会員の皆様への情報の配信をご希望の方は、
産学連携学会事務局（j-sangaku@j-sip.org）までご連絡ください。
バックナンバー：http://www.j-sip.org/mail_news.php